

'14 東書藝院人研修会開催

平成二十六年の院人研修会が、二月九日（日）に愛知県芸術文化センター十二階のアトスペースで開催された。



久野副会長の開会の言葉から風岡会長、豆子名誉会長の講話、五雲堂・石黒徳行様の表装に関する専門的なお話と続き、松浦副理事長の閉会の言葉まで内容の濃い研修。百四十名の出席者皆、充実した表情であった。尚、会長、名誉会長の講話の要約は次の通り。

◇風岡会長「私の書道遍歴について」

影響を強く受けた師は二人で、山本宏城・神谷葵水の両先



生。幼少時より山本先生の書塾に通い、相当多く書いたので技術に自信がついた。教員になろうと決めていた高校時代は、漢文・書道に感じて愛教大國語科東洋学教室を受験・進学。神谷先生の人間性に強く魅かれた。卒論の何紹基の研究における指導により、「書」は技巧だけの

ものでなく、個性・思想・文学との関係等、人間として取り組んでいけるものと得心し、書の専門家にもなりたいと思うようになった。卒業後、中学の教員に。紆余曲折を経て愛知教育大助手に就任した。授業以外の時間は本当に勉強できたが、集中して没頭できる機会が有難かつたし、重要だと感じたものだ。この頃より趙之謙に大いに取り組む様になる。活字からイメージが浮かんで来る程に。運良く資料が沢山手に入る環境にあったが、資料は大切である。字典の自作に取り組み、細かな面倒な事を継続して努力していく過程に於いて実に勉強になると理解できた。また「古人の求めたるものを求めよ」の言葉から、自身も古人の精神を辿ってみよ

うという事で北魏の楷書へ。隸書では苦勞し更に木簡。ここで芯になるものの必要性を痛感して武威漢簡の書法をベースに決めた。書体に関して現在は、雑然としていては駄目だが、統一感が有ればあまり細かく問わな」と考えている。古典を学ぶ時の指針は、上田桑鳩先生の臨書研究に影響が大きい。何に感動するか、どういう技法でそれが出せるのか、自身を表現する為の古典研究を念頭においている。行草は米芾の原寸大臨書を良くやった。水墨も三年程。側筆の味が理解できて、うまく取り入れれば書の幅が広がる感じがした。漢詩は現在も続けていて、書の周辺の世界も学ばねばと考えている。篆刻なら勿論篆書が要るし、金文にも興味がある。文字学の面白さを知ることができ、いつか篆書作品を発表する事が有るかも知れない。（以上）